

泉 靖 一 著

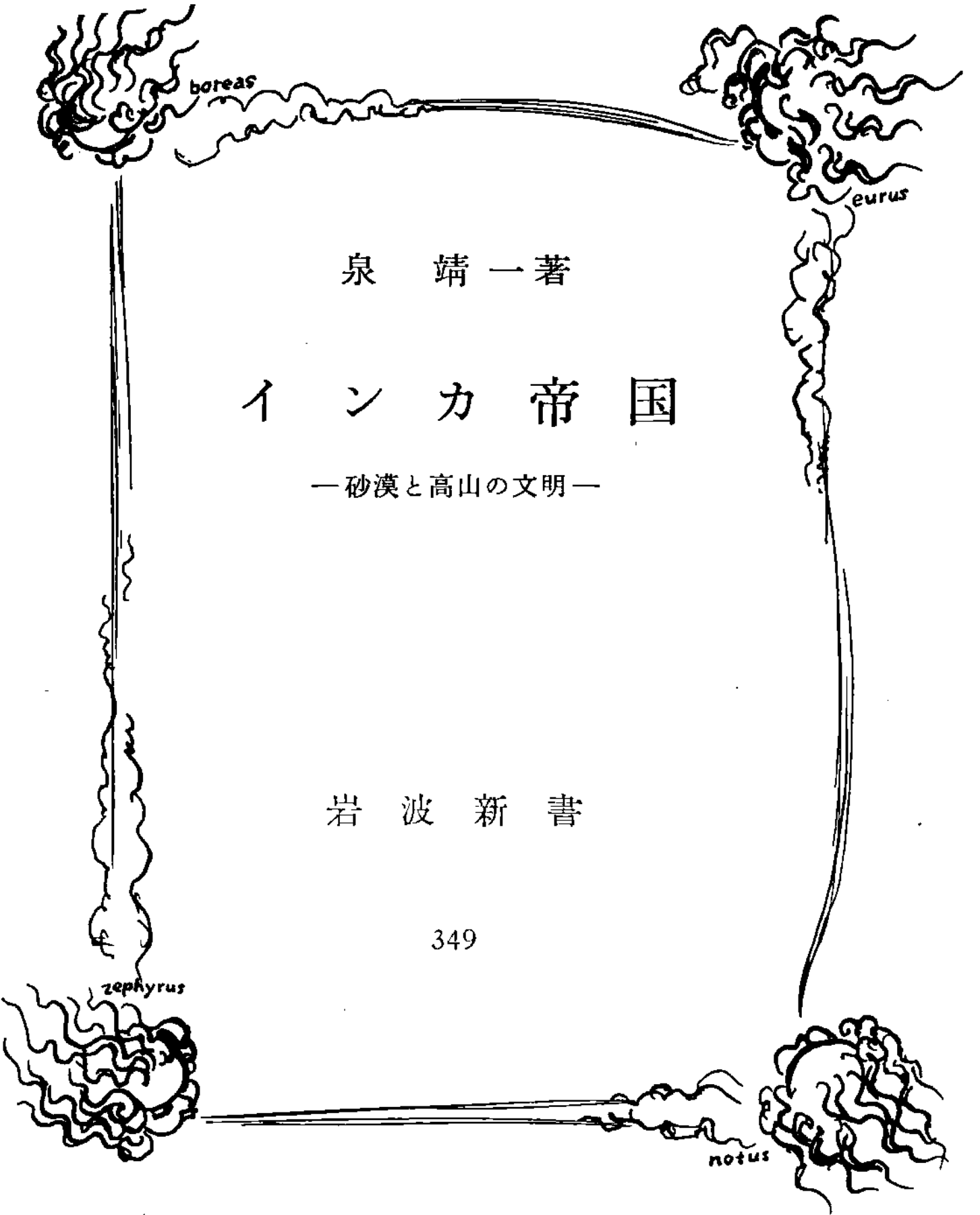
インカ帝国

— 砂漠と高山の文明 —



岩 波 新 書

D 62



泉 靖 一 著

イ ン カ 帝 国

— 砂漠と高山の文明 —

岩 波 新 書

349

泉 靖一

1915年—1970年

1938年京城大学法文学部卒業

専攻—文化人類学

著書—「アマゾン—その風土と日本人」

「ニューギニアの民族」

「移民」「インカ」

インカ帝国

岩波新書(青版) 349

1959年 6月20日 第1刷発行 ©

1985年 10月20日 第30刷発行

定価 530 円

著 者 いずみ 泉 せい 靖 いち 一

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

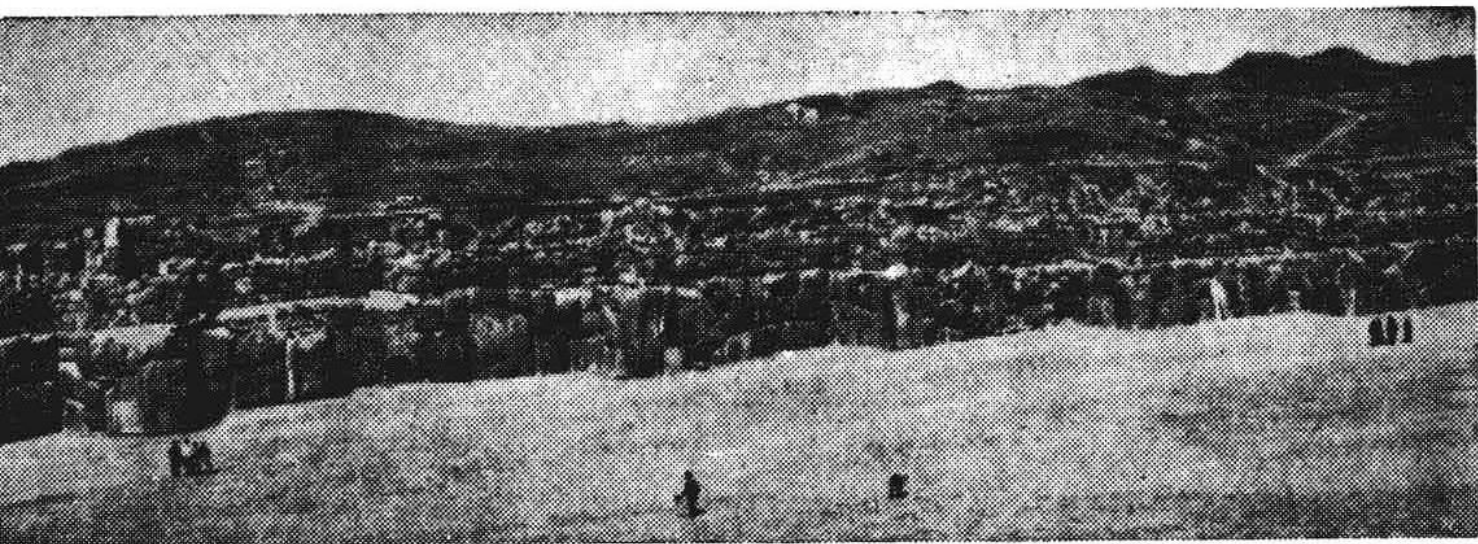
電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan



サクサワマンの大城塞

ブ
ロ
ー
グ
.....
一

地球は円かった——断橋——孤立した大陸と文化——旧大陸はインデ
オに救われた

I
ア
ン
デ
ス
文
明
の
夜
あ
け
.....
三

アンデスの自然——土器以前の文化——トウモロコシと土器——ペルー
の考古学者テーヨ博士の発見——チャビン文化——チャビン文化の基盤
をなすものは何か？

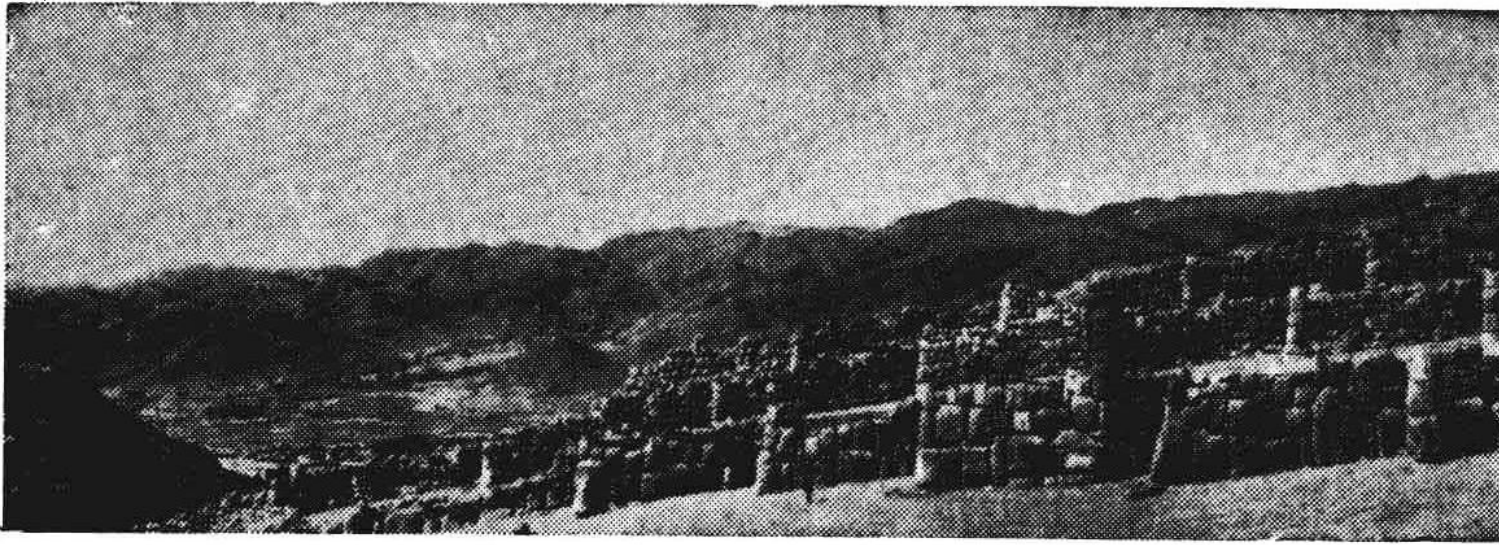
II
砂
漠
と
高
原
に
花
ひ
ら
く
.....
四

チャビン文化の廃類とその後につづくもの——開花期——モチーカの生
活——ナスカの人々——海拔四〇〇〇mの文明

III
大
都
市
の
発
展
.....
八

その前夜——チムー帝国——クイスマンク帝国——チャンカイ文化——
カハマルキーヤの廃都——チンチャ帝国——未知の世界——チウラホン
の廃都を探す——北部チリーの谷間の新事実——インカの祖先

IV
イ
ン
カ
帝
国
の
拡
張
.....
三



神々の世界——皇帝の座——最初の帝国主義者——歴史の日あたりのな
かに——太陽の帝国——皇位簒奪の争い

V 人民の生活 一五五

農民の一日——農民の一年——人間の一生——インカとは

VI タワンチン・スウユ 一八三

太陽の社会主義——戦いと支配——宗教と法——公共の事業——建築
——工芸技術と知識——結繩

VII 血ぬられた山脈 二三元

黄金郷——バナマの白日夢——未知の南方へ——第二次探検——イン
カ帝国にせまる白人の影——大殺戮——掠奪——反乱

エビローグ 二五九

スペインの占領行政——一八世紀の反乱——独立戦争とインディオ——
ボリビヤの革命——インディヘニスモ

アンデス地帯文化編年表 二三八

あとがき 二六九

索引・参考文献

プロローグ

—インディオ—

地球は円
かった

コロンブスは大きな誤りをおかしていることに、気づかなかった。一四九二年一月一二日、彼はスペインを出発して七一日目に、バハマ群島の一角に上陸する。コロンブスの助言者であり、フィレンツェの医者で、当時ひろく世に知られていた地理学者パオロ・トスカネリは、地球の直径とアジアの経度を誤算していた。従ってコロンブスは、インドに信じたものと信じこんでしまう。その後三回にわたる遠征をつうじても、彼はあくまでその信念をまげようとしなかった。

その土地がインドであるかぎり、その土地の住民はインド人—インディオであるはずである。やがてコロンブスの発見した島々や土地が、一般のヨーロッパ人の予想もしえなかった新しい大陸の一部であることが確認され、「アメリカ大陸」とよばれるようになった。しかし原住民をインディオ（スペイン語・ポルトガル語）またはインディアン（英語）とよぶならわしは、ついにあらためられてはいない。コロンブスの誤りが今日まで、そのままに伝えられているわけである。

アトランティス からきたのか

当然のことではあるが、一五世紀の終りまで、ついに旧大陸のだれもが知らなかったインディオが何処からきた人間かという疑問が生れてくる。いままでのインディオ起源論は、次の三つに大別することができ。

1 伝説的起源説 ヨーロッパ人は世界のあらゆることがらを、キリスト教の尺度で判断したり、歴史的起源の因果関係を、エジプト、ギリシャおよびローマにもとめたがった。そして、インディオの起源論も、はじめはこのような見方からはじまる。或る人はいう。旧約聖書を克明にしらべてみると、イスラエルの故郷を失ったユダヤ人の中で、十部族の行方がわかっていない。おそらくはこれらの諸部族が、海を渡って新大陸にたどりつき、インディオの祖先になったにちがいないと……。また一方、ノアの大洪水のあと、その子の一人が、新しい世界をもとめて、新大陸を発見し、住みついたにちがいないと考える人もある。

ドイツの考古学者ボスナンスキーはいう。プラトンの『ティマイオス』のなかで、エジプトの神官がソロンに語ったアトランティス大陸がインディオの郷里であったにちがいない。この大陸はジブラルタル海峡の西方洋上にあって、ソロンの時代(紀元前七世紀)から九〇〇〇年前には、強大な国家であった。ところがその後、海中に没してしまった。伝説の国アトランティスの住民の一部が、失われてゆく国土をあとにして、アメリカ大陸に漂着し、ここに新しい天地を開拓したというのである。

これらの諸説はみなギリシャ的な、あるいはキリスト教的宇宙観から出発した推測であって、

科学的なあとづけはむずかしい。従って、何時のまにかアトランティスのように、人々から忘れられてしまった。

2 新大陸起源説 一六世紀いらい、新しい生活をもとめる旧大陸の人々の群は、ぞくぞくとアメリカ大陸に流れこんだ。独身者の大部分は、インディオと結婚し、家族で渡航したものは、新大陸で沢山の子供を生んだ。インディオよりも、混血児メステイソやアメリカ大陸生れの白人がかえって強く、ヨーロッパ人にたいして、「アメリカ生れ」を意識することがある。新大陸起源説は主としてこのような人々により提起されたことに注目しなければならない。アルゼンチンの人類学者アメギノは、インディオの祖先はもちろん、全人類の起源は新大陸にあると主張した。

一部の学者はすくなくとも、旧大陸に匹敵する太古の人類の存在を信じている。その根拠は次のような事実にもとづくものである。一八四四年、ブラジルの東南部(ミナス・ジェライス州のラゴア・サンタ)で、マストドン、地上アリクイ、アメリカ原生馬の骨とともに人骨が発掘された。またマゼラン海峡に接したパユイ・アイケ洞窟から、長頭型の頭蓋人骨とともに、地上アリクイとアメリカ原生馬の骨が発掘された。旧大陸の地質学上の常識からいえば、これらの獣骨は中部洪積統に属するものである。従って新大陸にも、洪積期のかなり古い時代から、人類または人類に近いものが棲んでいたという推測は一応なりたつわけである。

しかし、この推測はつい最近くつがえされてしまった。というのは、人骨がその形態からみると、全く現在の人間と同じであること、および放射性炭素による年代測定

(炭素の同位元素は、成層中の窒素が、宇宙線に

作用されて生ずる。そのうちのあるものは放射能をもっている。放射性炭素は酸素と化合して炭酸ガスになり、地上におりてくる。それが植物の新陳代謝により、組織内にとりいれられる。植物が死ぬと、新しく放射性炭素がとりいれられなくなるので、組織内の放射能は次第に減少する。従って有機的遺物の放射能を測定することにより、その新陳代謝をやめた年代を推定することができるわけである。ポール・リベイは、一九五〇年に、この原理を利用して、考古学的遺物の絶対年代を測定することに成功した。もちろん技術的には、未だ多くの問題が残っているが、最近放射性炭素による年代測定法が、広く使用される傾向にある（結果、これらの骨格はいまから約八〇〇〇年前のものであることが確認されたからである。もし洪積期に属するならば、放射性炭素のしめす年代は、すくなくとも一万年より以前でなければならぬ。以上のことを思いあわせると、旧大陸では早くから絶滅してしまったマストドンや地上アリクイ、アメリカ原生馬などが、新大陸では最近まで生棲していたことに間違いはない。しかし残念ながら新大陸の洪積期以後の地質学的研究が完成されていないので、新大陸最古の人類にかんする年代は断言をはばかる。

3 アジヤ起源説 現在知られている新大陸の遺跡は、比較的に新しいものばかりである。しかもアジヤと新大陸をへだてているベーリング海峡は、幅がわずかに五〇キロメートルで、海の深さは五〇メートルしかない。インディオの身体特徴はアジヤ人——類蒙古人——にちかく、新生児には蒙古斑（尻部紫色の斑）が頻繁にみられ、眼じりに蒙古皺が存在する種族も多い。また体型全体のいちじるしい類似性は、北部のインディオとシベリヤの古い原住民との比較によって明らかにされている。

アメリカ大陸に、インディオの祖先が移住してきた時期は、あきらかでない。しかしそれはベーリング海峡ができたと思われる、一五〇〇〇年か二〇〇〇年前（最近の学説では、さらに古く三〇〇〇年と主張する学者もある）、つまり最後の氷河期のおわりであろうと考えられている。おそらく民族移動は、数回にわたり波をなしておこなわれたにちがいない。というのは、インディオ各種族のあいだの身体的

特徴には、相当のちがいがみとめられるからである。

断橋

ベーリング海峡の出現によって、アジアから新大陸にむかう、民族移動はほとんどまった。陸橋が断たれてしまったからである。ただ極北地帯におけるエスキモー族の移動は、その後もおこなわれていたようであるが、それは内陸の種族の構成や、文化の形成に大きな影響をもつものではなかった。

現在インディオとよばれる、アジアからの新大陸への移住者の、民族移動の経路や種族の構成を、その源にまでさかのぼって、具体的に裏付けることは困難である。インディオを、身性のうえからみると、アメリカ大陸を南北に走る大山脈の東西によって、ことなった型をしめしている。その一つは西方、すなわち太平洋岸の一群で、短頭をその特徴とする。他は東方、つまり大西洋側の中頭の一群である。この分類に、もし南北両アメリカにおけるちがいを加えてみると、北太平洋種族、北大西洋種族、南太平洋種族および南大西洋種族の四つの亜種に大別できる。これらの四群のほかに、さらに二つの亜種を考えなければならない。南アメリカの南端に住む、超短頭のパンパのインディオと、ごくわずかではあるが、おなじく南アメリカのところどころに散在している、中頭または長頭の古い身性をもった古インディオ群がそれである（扉の図参照）。おそらく、このような身性のちがいによる諸種族の分布は、遠くアジアから移り住んだ当時の、アジアにおける種族の出自、時代の新旧、アメリカ大陸における移動、種族群の力関係等を物語っているにちがいない。

また新大陸に移住してからの、諸部族の移動、分布については、言語学的にも、ある程度、裏付けが可能である。アメリカ大陸の諸語族中、極北のエスキモー・アレウト語族が印欧語族またはウラル語族、あるいはその両者にたいして親族関係がみとめられる可能性があるだけで、他の語族は全く無関係である。スワージー・グロフトクロノジの言語年代学によると、祖語から分離した言語は一〇〇〇〇年をすぎると、祖語とのあいだに、親族関係がみとめられなくなるという。

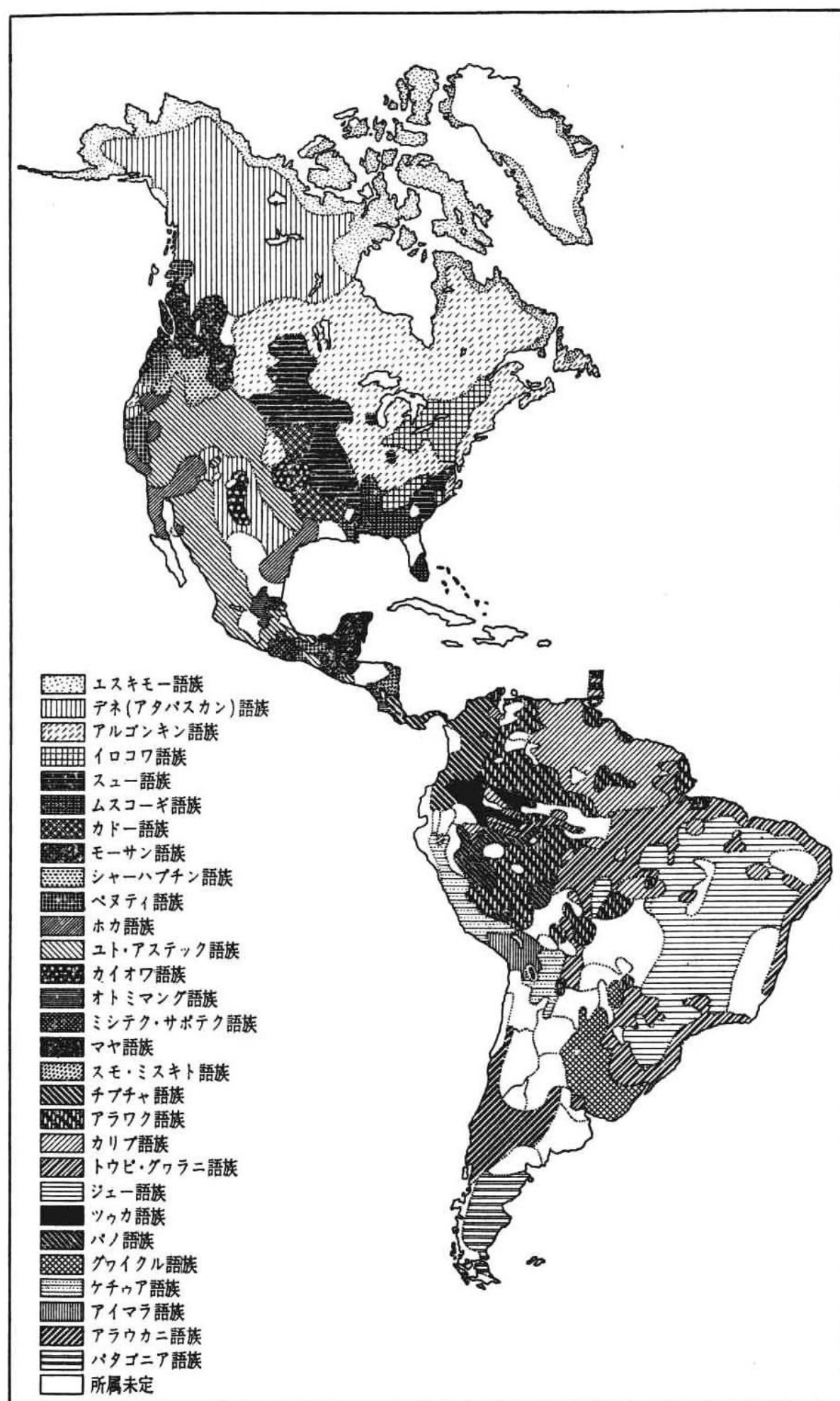
新大陸の諸方言の数は、さきにのべたエスキモー・アレウト語族をのぞいても、数百におよぶが、これらを整理すると、ほぼ二三ないし二八の大語族に区分することができ(第1図参照)。

孤立した民族と文化

インディオは、身性のうえからみると、旧大陸の人類、とくにアジアの諸種族と明らかに密接な関係をもっている。しかし、言語からみると、旧大陸の諸語群とはもはやなんらの連関性もたない。このことは、言語年代学の理論から推すと、すくなくとも一〇〇〇〇年以上まえに、両者が分離した可能性を、逆に証明することになる。

考古学と民族学の立場からみると、インディオの生活の諸様式のうち、古い年代またはその残存とおぼしい諸要素は、旧大陸といちじるしく共通している。例えば、投槍、鋸、棍棒、投石器、釣針、魚網等々をあげることができる。しかし、新旧両大陸のあいだの陸橋が断たれ、民族移動がとまったと思われる時期(旧大陸における旧石器時代の末期または中石器時代の初期)以後における、両大陸の文化のあいだには、重要な交渉がなかったようである。このことは、文化史のうえで、みのがすことのできない、大きな変革期である農耕の発見と文明の発生が、おたがいに影響されることなく、独

第1図 言語分布図



自の条件のもとに、別におこったことを意味する。従って、新大陸の農耕文化と文明とは、旧大陸のそれと、ちがった歩みかたをしてきたにちがいない。

新大陸に農耕がはじめられた、正確な年代は明らかでない。アメリカ合衆国ニュー・メキシコ州のバト洞窟から発掘されたトウモロコシは、放射性炭素によると、いまから約五六〇〇年以前のもので、現在知られているかぎり、もっとも古いものである。トウモロコシはインディオによって栽培された、新大陸の重要な作物であつた。このほかサツマイモ、落花生、南瓜、数種の豆、トマト、チリー唐辛子、キノア（アカザの一種）、タバコならびにジャガイモなども同様の栽培作物である。新旧大陸共通の作物としては、木棉、キャベツその他をあげることができるけれども、おそらくそれらは、別々に栽培されたものであろう。インディオはこのように、旧大陸では知られなかった、多くの植物を栽培した。しかし農具は、掘棒、踏み鋤、鍬の程度で、旧大陸のように、牛馬のような大家畜を使用する犁類は知らなかった。一方灌漑の工事は精巧をきわめたが、家畜類は貧弱で、ヤーマ、アルバカ、ワナコのような駱駝科の動物と、七面鳥、鷲鳥、アジヤ系統の犬を飼育したにすぎない。しかもこれらの家畜は、ヤーマが駄載用に使されたのみで、その労働力を利用することは、あまり考慮にいれられなかった。紡織、染色の技術は旧大陸のそれと変らないが、土器をつくる場合、ろくろやうわぐすりを使用しなかった。金属器は、銅・青銅器をつくつたが、鉄を知らなかった。そのほか、ガラス、車、絃楽器、アーチ、円天井などにはついに発明されなかった。

インディオ推定人口 (1492年)

地 域	推 定 人 口
メキシコ以北	1 000 880
*メキシコ	4 500 000
西インド諸島	225 000
中央アメリカ	736 000
*アンデス地帯	6 131 000
その他南アメリカ	2 898 000
	15 490 880

* アメリカ古代文明の中心地域

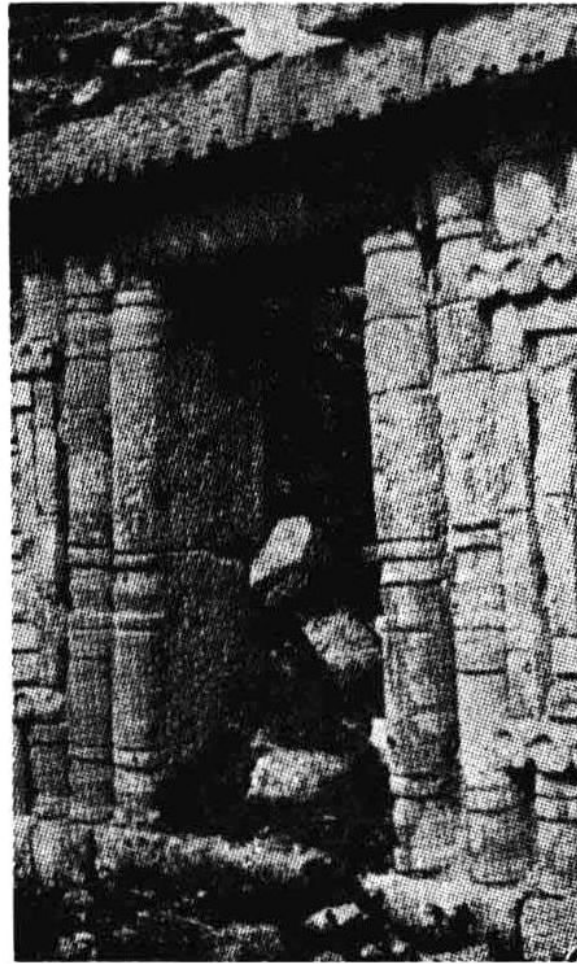
新大陸の文明の中心

集約的農業を背景として、人口が集中し、都市がつくられ、職業の分化がみられる文化を「文明」というならば、アメリカ大陸には

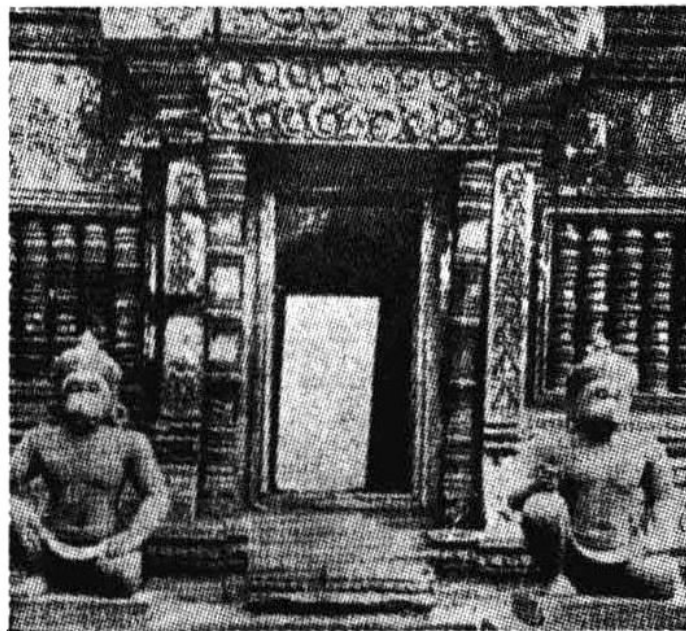
「文明」の中心は二つしか知られていない。いまコロンブス発見以前のインディオの人口の分布をみると、この点がただちに明らかになる。一四九二年のインディオの推定人口一五五〇万人のなかで、四五〇万人がメキシコに、六〇万人がアンデス地帯に居住していた。従ってこの二つの人口密集地帯、いいかえれば二つの文明の中心に、一〇六〇万人の人口が集中し、他の広大な地域には、合計して三九〇万人しか、住民がいなかったことになる。しかも文明の中心地帯は、旧大陸のそれとことなっていて、ほとんど大きく移動した形跡がみとめられない。ここにも新大陸の文化の特性をみることができよう。

ところが新大陸の古代文明が、旧大陸のそれとは無関係に発展したと考える従来の通説にたいして、最近新しい学説が提出されている。ハイネ・ゲルデルンを中心とする、この説の主張者は、新大陸の文明が、旧大陸文明の刺激によって、おこったものであると説く。その一つは中国の周代文明とアンデス文明の類似性、第二は安南の青銅時代のドンソン文化と南アメリカ青銅文明の同時性、第三はインド文明とマヤ文明における彫刻モチーフの共通性などから、ベーリング海峡が現われてからのちにもなお、

新大陸とアジアの間に、偶発的交通が存在していたにちがいないと考える。いうまでもなく、この説は結果論的であって、その過程をにわかに実証することが困難であるけれども、ますます多くの資料が提出される可能性をはらんでいる。



ユカタン半島のラブナ



カンボジャのアンコール——カンボジャとユカタン半島に、10世紀にあらわれた建築の様式は、写真のように柱が壁面の出入口の両側につくられている。これは偶然の一致であろうか？

旧大陸はインディオに救われた

新大陸がコロンブスによって発見されると、ヨーロッパ人はインディオにたいして、征服者としてのぞみ、すべてのインディオは奴隷の境遇に追いやり、彼らの富はヨーロッパにうばい去られた(p.257参照)。スペイン人やポルトガル人が、はじめに求めたものは金銀、宝石、染料ならびに香料であった。彼らは金銀を洗いざらいにインディオから掠奪し、融かして延棒にして本国にもち帰った。それらの金銀の

一部は、インドや回教徒諸国にもちこまれて、香料と交易された。また驚くべき多量のものが、寺院と王室のために使用された。今日もお、イベリヤ半島の諸国の寺院が所持している、金銀と宝石はおびただしいものがある。スペインのごときは、国内の寺院が現在もっている金銀細工によって、莫大な国債を支払ってもなおあまりがあるといわれている。だがこれらの金銀や宝石は、ヨーロッパの人民の幸福とは、関係のうすい「財宝」であった。

しかし、征服者や航海者が好奇心でおこなったことが、旧大陸を救う結果となった。アメリカ大陸に到達したヨーロッパ人は、彼らがいまだかつてみたことのない、栽培植物におどろいた。掠奪した金銀にくらべると、それらは取るにたらないものではあったが、トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモ、トマト、タバコその他の種子や苗を、ヨーロッパに土産として持ちかえった。それらは、はじめスペインやポルトガルの港に近い畑にうえられたが、またたく間に、ヨーロッパやアフリカの各地にひろがり、アジアにももたらされた。

これらのインディオによって栽培された新しい作物は、旧大陸原産の米麦類を栽培することのできない、痩せた土地や乾燥地にも適応した。また米麦類にとっては生産性の低い土地からも、高い収穫量が期待できたので、食料飢饉はしだいにすくなくなかった。それはヨーロッパ人が殺戮し、掠奪のかぎりをつくしたインディオからの「おくりもの」であったことに、しばらくのあいだ誰も気づかなかった。

大発見時代以前の新旧両大陸の栽培植物

	旧大陸	新大陸
野菜類	キャベツ, ちさ, ほうれんそう, たがらし, えんどう	キャベツの一種, チャヨッテ
根菜類	にんじん, 大根	じゃがいも(240種), タピオカ芋(2種), さつまいも, ヤム芋, オカ芋, オユコ, アヌ
果実類	りんご, なし, あんず, さくらんぼ, おどう	チリモーヤ, パンパイヤ, アボカード, トマト, チョコレート, バインアップル, いちご, サワ・ソープ, きゅうり, ラブスベリー, ブラックベリー(何れも木莓の一種)
種子および油種子	くるみ, 亜麻の実, けしの実, カメリヤの実, オリーブ	カジュ, ブラジル・ナッツ, 落花生, はしばみ, ヒッコリー, 栗
荳科類	えんどう, レンティル, 小豆, そら豆	カニワ, タルウィ, モーエ, 豆類(そら豆, 小豆をのぞく)
穀類	小麦, 大麦, ライ麦, 裸麦, ひえ, 米, 雑穀類	とうもろこし, キノア
香料	からし, さとうきび	チリーとうがらし, さとうきび
瓢	ひさご	ひさご(多数の変種)
繊維植物	木棉, あさ, 大麻	木棉, りゅうぜつらん
染料植物	あかね, インディゴ, サフラン	えんじ, アチオッテ, ヘニバ, その他多数